



昭和50年(1975年)
7月号(No.361)
社団法人 日本山岳会
(J.A.C.)

定価一部 100円

目次

- 本文・紀行など
 - もう気にしてはいられない
—入山規制—尾瀬の場合—
(渡辺公平) …(1)
 - 今西さんの“パンザイ”
—春の丹沢行—
(近藤信行) …(3)
 - 十二支会乙卯歳例会
越後国・光鬼山登山
(高木泰夫) …(2)
 - ネパール・ヒマラヤの旅
—海外登山研修会— …(3)
 - ポーランドからの手紙
—カンパチェン雜記—
(酒井吉国) …(5)
- 行事・委員会など
 - ナンダ・デヴィ登山計画
のその後 …(6)
 - 第二回日印合同婦人ヒマ
ラヤ登山計画 …(6)
 - <第三回山岳史懇談会>
松高山岳部と奥又白周辺 …(7)
 - 関西支部創立40周年記念懇談会 …(8)
 - 「東海山岳」第三号刊行 …(8)
 - 第18回紅葉会 …(9)
- その他
 - 神谷記念図書目録(I) …(9)

もう気にしてはいられない

入山規制—尾瀬の場合

渡辺公平

早く入山規制をしないと尾瀬の自然破壊は加速度を加えてゆくからと、夜間直行バスの廃止を提案した投書が六月六日付け朝日新聞朝刊に出ていた。

夜行バスの利用者はいわゆる神風登山者ではないのか、自然に親しみ、自然を愛するといいながらただ歩き抜けて来るだけの人たちに本当の自然を見直す機会を与えたいし、またマイカー族のために夜間戸倉からの入車禁止を提案するといふのである。

そして尾瀬入山者の大部分が利用するこの夜行バスがなくなれば尾瀬内で一泊しなければならぬ。その収容能力により、より直接的な規制ができると思うとその投書氏は結論する。

決して好ましいことではないが尾瀬をより以上の荒廃から守るためには、もう入山制限といういやな言葉を口にしなければならぬところまで来ていることを僕も肯定せざるを得ない。

ちょうど、この投書の掲載された前日だったか、実業之日本社から贈っていたいた「はるかな尾瀬」を読んで、なるほどと感心したのだが、この本の中にも入山規制という文字が各所に出てくる。

朝日新聞群馬版に昨年の二月末から九月初めにかけて連載された続きものをまとめたもので、同社沼田通信局の岸本記者が取材を担当し、四〇回以上も尾瀬に入ったというだけあって、尾瀬の現状を刻明に取材したルポが特に僕には

興味深かった。すでに一昨年あたりから上高地でも入山制限が話題となっているが、尾瀬には上高地以上に深刻なものがあるように思われる。

岸本記者のルポによると、現在の尾瀬には年間五〇万人のハイカーが来るが、そのほとんどが五月から九月に集中、ミズバショウのシーズンには一日ざつと二万人が木道の上に鈴なりになる。環境庁の調査だと一・五メートルの間隔を保つのがやっとだそう。

ところが同庁の依頼で行なわれた東京農大大江山教授の「自然公園における収容力に関する研究」によると、尾瀬の快適定員は一二〇メートルに一人が理想だという

から、現在の尾瀬は、その八〇倍に当る超過密ぶりということになる。これでは尾瀬の自然を守るなどということは至難の業といわねばならない。たとえ一人一人のハイカーが私

はゴミを捨てないといったところで、尾瀬で食事をし、トイレを使い、風呂に入るのだからゴミ、し尿、風呂の廃湯などで尾瀬を汚さずにはすむわけではない。「真剣に入山制限の実施を考えるべきだ」という声が自然保護関係者の間で強くなっていると岸本記者は報告している。

私はかつて涸沢ヒュッテで風呂に入れたといわれて驚いた経験があるが、文化が進んだせいか、近ごろは山小屋でも風呂の設備のないところは少なくなったようだ。

特に尾瀬ではハイカーが山小屋などという受けとめ方をしているからだろうが、入浴は当然のサービスと思いきや、

同記者の計算によると、客が入浴で使う湯の量は男二〇リ、女三〇リが平均。小屋一軒の宿泊者を男女各五〇人と少な目にみても二・五リ、ざつとドラム罐一四本分。特別保護地区内一七軒の山小屋を

合計すると、実にドラム罐二四〇本分になる。シーズン中毎日これだけの石けんや垢で汚れた湯が湿原や沼に流れこむ。量が多いだけにその汚染力はし尿をしのぐといわなければならない。

尾瀬を訪れるハイカーは今後ふえることはあっても恐らく減ることはあるまい。とすると、この風呂の廃湯がもたらす汚染はゆゆしい問題となるのではなからうか。

五日も一〇日もかかって縦走するとか、B.Cに長時日合宿するとかいうのなら話はまた別。尾瀬の入山者の場合はせいぜい一泊か二泊だ。その程度の短い山行でも、風呂に入って垢や汗を流さねばならないものである。小屋の従業員は論外として、ハイカーは貴重な尾瀬の自然を守るために、一晩くらい入浴を我慢してもいいように思われるのだが、どうであろうか。

山小屋にしても大切な水や燃料や労力を節約した上、環境破壊にブレーキがかけられるのだから、風呂のサービスをそれだけ他の面に回せばかえって客から喜ばれるかも知れぬ。

この本は新聞記者が丹念に現地を歩き回り、現在尾瀬の当面しているいろいろな問題をいろいろな人物にインタビューもして興味深く解説しているから、登山者やハイカーの共感を呼ぶものが多いが、結局は、なんらかの形で入山規制

をしなくては、もう尾瀬の環境破壊に歯止めをかけることはできないというところに落着きそうである。

若き平野長靖氏の活躍と悲愴な死によって尾瀬は自然保護の原点となったが、車道の延長などんでもない話と長靖氏が立上ったのも当然である。

僕も数年前、あるグループに加入して貸切団体バスで尾瀬日帰り行をやったことがある。夜行だからまだ夜明けまでいぶ間があるころ鳩待峠に着き、懐中電灯を灯しつつ山の鼻小屋へ下り、朝食、大休止の後、原を抜け湖を渡って長蔵小屋で昼食、三平峠を越えてその夜帰京した。正に通り抜けである。少しゆっくりできたのは長蔵小屋くらいであった。

それでも初めて尾瀬を歩いたという連中は大満足であり、尾瀬のすばらしさに酔いしれていた。この夜行バスのあるお陰で「はるかかな尾瀬」も今や日帰りがラクにできるのである。今の若いハイカーや行楽客にとって、もう尾瀬はは

るかな存在ではなくなっているのだ。

劈頭の投書のように、この夜行バスを廃止すれば尾瀬内で一泊しなければならなくなる。したがって山小屋の収容能力から直接的な規制ができるという考えが成り立つ。

少なくとも旅行業者が集めてくる観光団体バスが規制されるだけでも尾瀬の過密状態は相当緩和されるだろう。

美ガ原でも、王ガ頭まで自動車道が開通したとたんに、一升ビンなどをぶら下げたほろ酔い機嫌の観光客が目立つようになったが、尾瀬でもこの種の団体客を見うける。もともと尾瀬はこのような観光客の入ってくるところではないのである。

岸本記者のインタビュウで西丸震哉氏も、入山制限の実施はやむを得ない……山小屋の収容力がいっばいになれば登山口で規制すべきだ。いっそのこと戸倉で規制してもいい。ここからは徒歩四時間、それでも行こうという人が行くべ

きだ。そうすればハイカーの質はかなり淘汰されようという意味のことを話しているし、また一〇年も尾瀬の保護に取組んでいる県の文化財保護係長磯貝さんも、規制は一斉にできなければ部分的、一時的にでもやるべきで、交通の便をよくせず、徒歩のアプローチを長くすれば必ずから規制できる。

だから国鉄や観光屋が無制限にハイカーを運んでくるのを自粛してほしいといっている。

とにかく日本の山は、立山でも乗鞍でも御嶽でも大台ガ原でも、あまりに交通の便がよくなりすぎた。それによる恩典も過小評価すべきではないが、もしそのことが自然破壊に拍車をかけるものだといふ事実が生まれたとしたら、速かにその便利さを規制しなくてはなるまい。

山男のエゴなどといわれても、もう気になどしてはいられない。尾瀬に第二のヤマメ平をつくってはならないのだ。それが今日に生きるわれら国民、特に山を愛する人間の責任だと信じる。

十二支会乙卯歳例会

越後国・光鬼山登山

高 木 泰 夫

十二支会については、すでに告知の向きもあるだろうが、名の通り十二支の名を冠する山をその年の干支にしたがって一山ずつ登ろうという会である。子の泊山(伊勢国)から始まってすでに一

本山岳会の現地集会の観を呈しないうでもなかった。ちなみに本会員、今西会長はじめ三名。

巡し、只今は二巡目。本年は卯歳にちなんで、越後国岩船郡関川村の光鬼山(九九六・三メートル)を選んだ。二等三角点の山である。例会は元来、年の始めに催すことが多かったが、土地柄、五月連休まで延期していた次第である。参加者は老若男女合わせて五十一名、加うるに地元関川村山の会および

満の山とは思えないほど、立派な山容である。聞けば、この山は修験の山で、九世紀の中頃、慈覚大師によって開峰され、以来近隣の尊崇を集めているということだが、それも尤もとうなずかせるだけの風格がある。

ことだから、往時をご存知の方々は、今日の盛況ぶりに隔世の感慨を催されることだろう。

小学校の校庭で入山のお杖を受けるころ、ポツリポツリと雨がきける。出発。尾根に上って細径を辿ると、タムシバの白、ユキツバキの真紅、カタクリの紫、イワウチワの淡紅色が新緑に散って、五月の山はまことに賑やかである。虚空蔵峰、観音峰を越えて雷峰にかかる頃風が出て雲が切れ杖差岳の巨体が姿を現わす。一同大歓声。

戦争中の軍事教練や海征かば水つく屍が連想されて、いやおうなしに拒否反応をおこしかねない私だが、この今西さんのパンザイは、いかにも愉快なセレモニーであった。三角点を、極限なるもの"の存在としてとらえる今西美学の率直なあら

独特のおもしろい。両足をふんばり、石突きを上にして杖を斜めにかまえるのだ。そして左下ふかく杖をおさえこんでから、パンザイのかけ声とともに、右上の天空たかくつきあげるのであった。"ヨイトマケ"の変形といえるかもしれない。パンザイなどというと、

大山の三角標石をやわらかになでまわしていたかとおもうと今西さんは「さあ、パンザイ、やるでえ」とみんなに声をかけた。標石のまわりにまるく輪になって、頂上における儀式がはじまる。

なによりもまずその構え方が

われなのであろう。バンザイのあと「いい山につれてきてもらて、みなさん、ありがとう」という言葉が今西さんの口からとびだしてきた。そこで頂上の乾杯がはじまる。

四月十六日、一行はまずヤビツ峠から大山にのぼり、いったん塩水橋へ下ってから、堂平から丹沢山へ、そして蛭ガ岳にいたって頂上小屋に一泊、翌日は往路をもどって、宮ガ瀬から相模湖へぬけたのだが、かんばしからぬ天候のなかにありながらこの丹沢行では三つの頂上をふむことになった。今西さんの記録では、七七七から七七九番目の山にあたる。

* * *

丹沢行の相談をもちかけられたのは二月の理事会のあとだったが、今西会長にとって、新幹線の手窓から眺める相州の名山は、かなり気になっていた山なのであろう。入れるところまで車を利用することを条件に、三つの山の計画をしめされたわけだが、検洞丸からユージンへ下って西丹沢をのぞきましようと言うと、それはならんと否定された。それは運転者への思いやりかもしれないが、いささかも妥協をゆるさない今西さんの行動原理をみるような気がした。

『自然と山』のなかに三角標

石を「山頂という極限のシンボルとして、その場になくてはならない自然の一要素」とみるということがのべられているように、今西さんのピーク・ハントには三角点にたいする執念がもえつづけている。検洞丸より三角点のある大

今西錦司さんの“バンザイ”

—春の丹沢行—

近藤信行

群山に興味をよせられていたことは、それを証明するものかもしれない。

丹沢山頂でのバンザイをすませてから、夕刻、蛭ガ岳にたどりついた。しかし、頂上の儀式は明朝のためにのこしておくことになった。その夜、小さな蚕棚のベッドの上で七人が体をよせあつて、たのしい酒盛りがつづいた。

翌朝、頂上でバンザイをしようと出かけていった。このために一本の葡萄酒をのこしておいたのだ。あいかわらず雨もよいの天候だが、検洞丸や大群山を眺望しえ

たのは幸いであった。樹木がきりひらかれて、だだっぴろくなつてしまった頂上で、三角標石をさがしにかかっている。かんたんに見つかるとおもっていたが、どこにあるのかわからない。一行は手分けして風つぶしにといつてよいほどにうろつきまわった。二、三〇分もさがしたのだろうか。仕方なく葡萄酒の栓をぬくことにした。「三角点がないから、バンザイでけんな」と今西さんはさびしげに言った。

「これはバンザイよりも、一級下のヤッホーやでえ」みんな、それぞれに杯をとって、その経過如何とみまもっている。今西さんは、ヤッホーホッ、ホーと野猿のごとき奇声をあげて、葡萄酒を一気に飲みほした。これが蛭ガ岳頂上のセレモニーであった。

参加者 今西錦司、山崎安治、神崎忠男、須田紀子、岩田伝三郎、近藤信行、〔横浜山岳会〕石川治郎、奥野幸道、福士季夫。

* * *

その後、奥野氏からの来信によると、蛭ガ岳の三角標石は、小屋のベランダの下にあって、少し土に埋まっていることが判明した由。

そして最後の登りは胸突き八丁。喘登を重ねて頂上に出る。惜しむらくは今日の天候である。今ほもう杖差岳も雨雲の中に姿を消し、また雨の来そうな気配である。晴れていれば飯豊、朝日の展望を恣にしただらうに。最後尾の到着を待って、まずは恒例の万歳。そして乾杯。今年古稀と還暦を迎えられた方々へのお祝い品贈呈を終って、心尽しのお味噌汁をいただくころには、雨が一段と激しくなつた。風も加わって木の葉が舞う。早々の下山、解散。雲母温泉で一風呂浴びてサッパリした後、帰路についた。車中の窓から光鬼山はいかにと探したが、雨はますます激しく、雲の彼方にあつて、もう

第一回海外登山研修会報告

ネパール・ヒマラヤの旅

田村宏明

エベレストのベースキャンプ設営が一段落つき、さてこれから数ヵ月間も滞在するこの趣向をこらした基地に何と命名しようかと、衆議一決したのが「ザ・ランド・オブ・ホモ・ルーデンス」でした。約二十年前に同じ目的で設営した人々とくらべて隔世の感云々と私は日記にしましたのを覚えております。それから五年をへて世の中はさらに変わり、多くのトレッキング・パーティーがキャラバン・シ

再びはまみえてくれなかった。なお、本会会員の参加者は次の通りである。(敬称略・順不同) 参加者 今西錦司(会長)、亀田与三次(石川)、藤島玄(越後以下同支部会員)、広沢伝一、斎藤平七、井口正男、五十嵐篤雄、坂井厚、鈴木敏雄、小野健、川井洋之介、矢田目昇、市村貞夫、豊島洋一、五十嵐克、平田大六、渡辺竜吉、松井辰弥(岐阜・以下同支部)、賀嶋増造、木村繁、坂井久光、佐藤正雄、塩湯庄太郎、高木志茂子、土倉九三、本郷孝文、松浦勇次、宮後正樹、山口政一、横田明男、高木碯男、藤井茂雄、高木泰夫

一、メンバー

コーチ陣は田村宏明(リーダー) 中島道郎(ドクター)、山本良三(装備・輸送)、大倉昌身(食糧)の四名で、全員ヒマラヤ登山経験者。

研修生は山川力、菅見愛子(記録)、北林嘉鶴子(食糧)、鈴木実(写真)、江波戸俊弥(医療)、斎藤かつら(食糧)、野本直記(医療)、岸栄(装備)、北島光子(食糧)、三渡忠臣(総務)、安藤忠夫、鈴木章(輸送)の女子五名を含む一二名。最年長者六二歳、最年少者三二歳で全員の平均は四三歳と少なからぬものでした。

二、行動経過

五月の連休を利用する条件下での計画であり、万一の日程延長をも配慮し、一二日間という最短期間で企画しました。

四月二三日夕刻、エア・サイアムで一五名は東京からバンコックへ着き、翌日のロイヤル・ネパール航空への乗継ぎのため、空港と市の中間に新設されたゴールデン・ドラゴン・ホテルへ一泊。ここで一研修生が三百ドルの盗難に会い出鼻をくじかれた格好でした。

四月二四日午後、国際空港として拡張され、新装なったカトマンズに到着しました。ここでも市中心部までの中間にあるネパール・ヤク・ホテルに到着し、東京の旅行代理店経由で連絡をとってあったヒマラヤン・トラベル・アンド

・ツアーに対し目的地的ランタン谷へ飛ぶ軽飛行機のチャーターについて確認しました。予定どおり明後二六日までに四往復、三〇日に同数の帰途分の飛行手配をしているとのこと。全員張切って準備にかかりました。

二五日はトレッキング許可証の入手、買物、挨拶廻り等で各担当者とはび廻ってしまい、悪い知らせが入ったのは午後になってからでした。ランタン谷は降雪のために着陸ができず、第二案のエベレスト方面のシアンポチェカルクラへの計画変更を考えてはくれまいかとのこと。連休で多数の日本人が入っているエベレスト方面はどうも乗気がしないところから、ランタン部落へ二日行程の地点に新しく出来たというタンジェット空港へ飛ぶことで再交渉に入りました。

ところがこれも国王の視察が急に決定したことから、軍隊の許可がとれないという。そのうち、飛行機の確保ができないエイジェントが、いいのがれをしているといった情報が入り、夜中まで走り廻りました。

二六日もそういうわけでカトマンズに残り、ついに車でポカラ方面へ転戦するところまで話が出来てしまいました。エベレスト・ビュー・ホテルを経営している会員の宮原さんのお骨折りで、シアンポチェムまで二八日に飛べるようになり、一同ほっとしました。仕事

の都合で遅くなった大倉氏も入り一六名全員で午後カカニの丘へドライブを楽しみましたが、残念なことに山はほとんど見えませんでした。

二七日は、宮原さんが今度建設されるカトマンズのホテル用地に案内して貰ったり、土産物を買ったり、のんびりした休日でした。

二八日は早朝に一四名がツインオッター機でルクラへと、初めてのヒマラヤの山々を間近に見ながら飛び、そこからピラタスポータ機で二回でシアンポチェ空港に集結しました。空港からホテルに入り、最後のカトマンズからの直行便で荷物と共に二名が追いつきました。ホテルの手配でシェルパを備い、トレッカーで賑わうエベレスト方面を避けて、西のポテレストに沿って二時間のところにある、テシヨコーラのすばらしいキャンプ地(三四〇〇m)に着きました。

桜草が咲き乱れる芝生をぬって氷河から出た乳白色の小川が流れ、深紅色から乳白色に至るさまざまな花、満開の石楠花林の背景にはコンデ峯の水雪が輝いています。もともと、三人のドクターは全員の血圧に心電図の測定にと、多忙でそれどころではなかったようでした。

二九日はこの研修会のクライマックスでした。全員とシェルパ三名はさらに西へ進み、途中体調に從って三グループに分れました。

二時間半ほどでターメの部落に着きました。ここから北を望むと、これまでと一変してチベット風の褐色の広い谷が続き、最奥にチョオユが遠く雪煙を上げて見えました。チベットへの古くからの交易ルートであるナンパ・ラはその左にあるのでしょうか。この先はトレッカーは立入れぬため、西進してターメ・コーラ沿いに左岸を行きます。中島、山川、鈴木、北林らは部落の上手にあるお寺の、立派な仏像を見物したりしてこの付近(三八二〇m)に留りました。

コンデからテンカンポチェに連なる二kmの大岩壁を対岸に見ながら広い谷を行くと、リブグ部落を通り抜けて、山本、菅見、北島、岸らの到達地点、四三六〇mに至ります。この先は美しい湿原が続いた所に、テンポ部落が末端氷河堆石を背にしてあります。大倉以下の健脚グループは堆石のガレ場を登ってから引き返しました。この氷河の最奥の峠がテシラプチャです。帰路、田村、三渡、安藤、鈴木らは左岸の丘に登り、四六〇〇mの最高到着記録をつくりました。「西洋人が二日でやる行程を日本人は一日でやる」とシェルパがぼやいた一日でした。

三〇日もまたシェルパらがぼやく長丁場でした。キャンプを撤収して、ナムチェバザール経由でルクラへの約二〇キロを半日ばかりで歩いたのです。もともと、ナム

チェバザールでシェルパの家へ入り込んだり、女性隊の安否を思いながらエベレストに別れを告げて茶屋でチャンを飲んでいい気分になったりしながらでした。途中で足を折って苦しんでいる農夫を、中島ドクターが助ける美談も一幕入りました。

五月一日、心配した帰途の飛行機も二便で全員が乗れ、無事に再びヤク・ホテルに到着しました。五月二日には名残り惜しいカトマンズを後に、バンコックへ飛立ちました。後始末の一切は翌日まで残る大倉さんに押しつけて、バンコック空港には思いがけぬ出迎えがありました。往きのホテルの支配人が、盗難にあった金が出た知らせを持って待っておりました。再び不便な場所にある例のホテルに入らなければならぬはめになって、バンコックの夜を期待していた男性諸君はくさってしまいました。でも、その夜皆で食べたタイ料理で皆はすっかり機嫌を直したようでした。

翌日はバンコックの休日を堪能し、大倉さんも夕方には合流しました。ちょっと残念だったのは盗難の現金は二百ドルが返っただけでした。それでも奇跡的でした。今回の研修会では天気にも全く恵まれ、雨に会ったのは二十五日夜だけで他は全部晴天でしたし、ツイていたといえましょう。

五月四日、この心かげの良い一

六名は無事羽田に夕方着いて、解散しました。

三、会計

収入	参加費	三、五一〇千円
支出	運送費	二、九二二千円
	人件費	三九千円
	宿泊費	二五九千円
	保険費	六五千円
	食料費	五八千円
	雑費	一六七千円
合計		三、五一〇千円

四、おわりに

去る五月一日に反省会を開いて細部にわたる検討を行いました。が、何分第一回海外研修会という新しい企画であり、多分に反省する点もありました。全員一致する

ポーランドからの手紙

—カンパチェン雑記—

酒井吉国

チャチュウの谷を奥深く行くとジャヌー氷河の岨に出る。

突然目前に「眠れる獅子」ジャヌー北壁の垂直の岩と氷が輝いていて、凄いと私は心にこんなすばらしいところがあったのかとぞくぞくするような気持ちでつかり感激して長いあいだ見てしまつた。私は六十三歳だ。これからカンパチェンに隊員十一名と行くのだが、ジャヌーの北壁を見られたことだけで充分なような気になつてしまつた。

結論として、今後このような企画を実施し、是非もう一度参加したい、ということでした。

主催者としては、今回の試みをさらに発展させるべく、より綿密な計画をねつているところです。できれば今年の年末から年始にかけて、第二回目の会を実施したい所存であります。

ホモ・ルーデンスの遊びに對しカイヨワは六つの特性をあげておられます。自由と自発性があり、明確な時間と空間のもとで、結果は未確定の、利害を伴わぬ、規則に従つた、非日常的な活動。これこそ今回の主たる目標であります。

アサデサのカルカを過ぎると五〇メートルばかりの徒渉をしなくてはならぬ。シェルパが氣を使ひやくに乗せられて涉つた。その先に有名な奇岩「トリのときか」が遠く見える。まっすぐ進めばカンチェンジュンガ氷河に入るが、ラムタン氷河に入るには直角に曲り、幾つかのモレーンを越さなくてはならない。息づかいも荒く頑張つて登つて行くと、四七五〇メートルのBCに到着する。

BCはラムタン氷河を足下に見

下ろし、反対側のラムタンピーク側には、四〇〇メートルばかりの岩壁があるきれいなモレーンの台地だつた。正面は手ごわいアイスフォールに取りまかれ、その上は一見平凡そうに見える雪原、そしてヤルンピークから続くリッジの左端にカンパチェン・ピークが一望できる。

チベット語で「大きい馬」というが全くその通りの山容である。ここまで一気にきたので頭がいたい。食欲もない。一夜をBCであかし、すぐ高度馴化もかねて私と、リエゾン、シェルパの三人はグンサに降ることにし、C2設営完成のころにはまたBCにもどつてくることにした。

さてグンサにきて体調はよいが何の用事もない。村人の話では上の方にいくと池があり、そのそばに洞窟がある。そこでラマ僧が修行したという伝説があるという。私は早速行くことにしたが、その地は薪がないからキャンプは駄目だという。まあ行かれるところまで行こうとヤクを連れてグンサを朝早く出発した。

ヤマタリ氷河の左側の山道を、ヤクに乗つたり降りたりして直線的に森林帯を登ると一気に開けてジャヌーの一部が見える。ガラ場を二時間ばかり荒い呼吸で登つて行くとカルカがある。

あとひとふんばり、一時間ばかりモレーンをゆくと立派な岩壁があつた。その下にはまぎれもなく洞窟が二つある。ここがラマが修行したという伝説のあるところ。その横に小さいが千古の水をたたえた池がある。前面は平坦な美しい草原でキャンプの石積がある。その奥にジャヌーが見える。全く神々しい神秘的な景色だ。

シェルパのパサンダワーはこの付近は知つていふというが、ここがフランス隊のBCであつたことを知らないらしい。また村人も知つていない。しかしキャンプ跡を見るとフランス製の空罐があるの、たしかにここがフランス隊のBCであつたことを彼も私も初めて知つた。思いもよらずケガの功名というか、ヤマタリ氷河のジャヌーBC四五〇〇メートルにこられた。私は空罐に「成城隊の成功を祈る」と書いておいてきた。翌年成城隊と行を共にするという、キチンボーイのダヌーにそれをいっておいだが、積雪の下になつてしまつたのだらう、見たという話は聞かなかつた。

ヤマタリ氷河の南西稜は神秘的といいたい。ジャヌー氷河の北壁は垂直の城壁と形容したい。両面ともこれほど人を寄せつけない山容の山はない。私はたまたま両面から恐怖の峰ジャヌーを目前に見ることができて満足した。

そして帰りはヤマタリのモレーンを一気に降り、夜のとばりも迫つてくるころ、ようやくグンサに

帰つてきた。九月二日、またBCにもどつた時は、既にC2の設営は完了していた。

私たちは幸福にもカンパチェン(七九〇二メートル)のパミットが取れたが、翌年(一九七四年)のブレはポーランド隊、ポストにはユーゴ隊がそれぞれ控えている。そして未登頂の山である。

俄然、鬭争心がわいてきた。ぜひとも立教隊で初登頂をなしたい。実は私自身戦争にきたような氣持になつてきた。隊員にあまり刺激的な言葉は出してはいけな

前中は天候もよかつたので順調にいっていたが、九月の末から一〇月半ばにかけて天気はひどかつた。強引にC4(六六五〇メートル)を設営完了したのは一〇月一日だつた。不運にもその夕刻から猛吹雪におそれ、二晩はテント維持に努力したが、ついに撤退かなお維持すべきかの瀬戸際

一〇月六日から始め、C2に八日二一名が集結したが、またまた前より猛烈な降雪に見まわれ、BCをはじめ全テントが埋めつくされ

は埋めつくされ

てしまった。また退却である。全員ビバークしてC2から四二時間もかかってBCに帰着した。

われわれはこの失敗を悪天候のせいにはしない。判断と行動に多

多誤算があったと反省している。私はBCに四〇日程いたが結構用事があった。雑用は全部私が引受け、DCに行ったり、ウエッジ・ピークのモレーンに登ったりして、最後にC2に行くべくC1まで登った。

その間いろいろなことにつづかった。前半は何としても登らせてしまおうと、闘志が大いにあったが、後半に入ってから、なんとか登らせたいという気持ちに変わり行程的計算ばかりしていた。トランシーバーをオープンにして、一日中状況、行動の連絡をとっている時など、本当に神経がすりへる思いがした。

私は心の底で常に重圧を感じていたのである。もう一つの戦いは食いものである。いろいろなのはあったが結局チャパターやめん類、カレーライスなどが主なものになる。覚悟はしていたがつくづくうまいものを食べたいと思った。

敗退に終り、グンサに降り早速鶏の買い漁りにかかったが、村人たちは大事にしてなかなか持つてこない。私が持つてこいというとか案外集る。パラサップとなるといったものだ。これで終りだとい

うまで買いつくしが結局十羽ばかりだった。それも痩せかけた貧弱な脂気のない鶏だったが、ヤクやヒツジなどよりはるかにまじだった。二〇代と三〇代の隊員とは食欲が違う。二〇代の者たちはあんなまずいものを美味いといつてよく食べる。日本で何を食ったのだと聞いた程だった。たくさん食う奴を登頂隊員しよう

と冗談ともつかずいったことがある。ヒマラヤはまったく耐え忍ぶところだ。さまたまな想い出もうすらくころ、ここの年頭に思いがけず、ポーランド隊から一通の手紙を受取った。彼らはわれわれの選んだルートに登高し、輝しい初登頂をなしとげた。

ナンダ・デヴィ登山

計画のその後

来年度ブレモンズン期に予定されるインド、ガルワル・ヒマラヤの最高峰ナンダ・デヴィ縦走を計画しているグループでは、現在約二〇名の会員が活動している。メンバーは東京を中心に名古屋、関西、九州に若干と地域的にも構成も多彩である。メンバーの幅もひろがり、計画も細部を検討し、数量化する時期にきたと判断し、総務、装備、食糧、その他いくつ

かの分科会を四月に設けた。同時に分科会の調整、および各メンバ

われわれはカメラをC4に残し退却してきた。唯一の高所写真も永久に氷雪の中に埋もれてしまっただか、あるいは飛ばされて氷河の中に消えていってしまったか。

ポーランド隊はプラトーに登ると、雪に埋った、凍りついたテントの一部を発見して掘りだした。その中にカメラと撮影済みのフィルムがあった。まさしく立教隊のC4だった。

彼らは本国に持ち帰りフィルムを現像して送ってくれた。全然破損していなかった。越冬したカメラも健在らしい。

私たちは、二度と見ることはできないと諦めていた高所の写真を手に入れることができたのである。

一が計画全体の進行状況を把握する場をつくるため、随時全体会を設けることにした。その第一回を五月一日に行ない、一四名がこれに参加した。ここでは計画の基本となる登攀計画を中心に討議、検討をした結果、四月の会報に発表した原案よりメンバーをふやす必要のあることが確認された。ナンダ・デヴィ主峰および東峰間の縦走隊一パーティ二名をだすには

両山頂まで計九名の隊員、シェルパが荷上げに従事せねばならず、このことは隊員、シェルパ各人に高度な登攀技術と自己管理能力が要求される。

修正された基本線に従い、六月中旬までに必要な隊員数、装備などの数量計算を終え計画検討段階における最終案を完成させた。

現地交渉と現地事情調査は六月に長谷川良典、八月に梶正彦、九月に加藤保男をインドに送り、食糧、装備などの現地調達の可能性、計画の最終的交渉、アプローチの調査をそれぞれ行なう。なおトレーニング山行を各分科会が持ち回り担当し積極的に行ない、メンバーの交流、技術的な統一をはかる必要がある。その第一回として五月二四、二五日の青年懇談会、指導委員会共催による谷川岳芝倉沢での雪上技術講習会に参加し交流を深めることにした。

ナンダ・デヴィ縦走計画は現在基本計画作成段階にあり、隊員決定は秋になるので、ヒマラヤでのこのような計画に興味を持たれる方は積極的に参加していただければ幸いである。(梶 正彦)

第二回日印合同婦人ヒマラヤ登山計画について

インド婦人との合同登山隊派遣計画は、一九六三年に三田幸夫氏が本会のエベレスト登山計画実施のため渡印されたおり、インドのエベレスト隊長M・S・コリー氏との間で発案されたもので、一九六五年日印婦人合同登山隊の実現について正式提案があり、当会は

ガール・ヒマラヤへの準備をすすめていきましたが、印パ戦争のため一時中止のやむなきに至りました。その後一九六七年インド登山財団会長H・C・サリーン氏より再度合同登山の提案がなされ、一九六八年四月第一回日印合同婦人ヒマラヤ登山が実施され、パンジヤ・ヒマラヤのカイラス・ピーク(五六六メートル)に日本四名、インド六名の全員が初登頂しました。

一九七四年七月、当初から夢だったガール・ヒマラヤの一部が解禁されたことを知り、今回七たびに第二回日印合同婦人ヒマラヤ登山計画として当会(婦人懇談会)よりインド登山財団に提案して、カメット峰(七七五六メートル)の正式許可を得ることができました。

カメット峰はインナーラインの外側に位置し、チベット国境間近にあるにもかかわらず許可されたことは、インド登山財団の日本山岳会に対すなみなみなならぬご好意のあらわれであり、また多くの方々のお力添えによるものであると思います。

カメット峰は決して容易なものではありませんが、二つの国の隊員が心を一つにして、この美しい峰の頂に立ちたいものと念じております。

第一回の登山は日印相互の理解と親睦を生んで今日に至っている

のですが、続く第二回の登山によってこの輪をなお一層広げ、今後の日本山岳会とインド登山財団の友情をさらに深く得るものと信じます。

一、隊の名称 第二回日印合同 婦人ヒマラヤ登山隊 一九七六。

二、目的 カメット峰（七七五メートル）登頂。合同登山を通じての日印親善。
三、隊の構成 日本山岳会とイ

第三回山岳史懇談会

松高山岳部とその奥又白周辺記録

図書委員会主催による第三回山岳史懇談会が去る三月一九日夜、長老の福林正之氏を含む多数の松高山岳部出身者を日本山岳会ルームに迎えて開かれた。

山崎安治氏の挨拶に続き、春田俊郎氏が松高出身者を紹介されたあと、本会評議員でもある今井田研二郎氏の回想談を中心に、昭和初期の前穂高東面における松高山岳部の足跡が数々のエピソードを交えて語られた。

実はここ数年来、山崎氏からは幾度もお叱りを受けており、日本の登山史上に一つの空白を作ってしまったのは私の責任だというわけで、奥又白を中心とした昭和初

四、日程 一九七五年九月初旬、決定、一九七六年五月初旬、隊員日本出発。ニューデリーにてインド側隊員と合流。上旬ニューデリー発、下旬B・C建設、登山期間三十五日、六月下旬B・C撤収、七月上旬ニューデリー帰着、解散。中旬帰国。
(須田紀子)

ンド登山財団の合同遠征の形式。各国五名。

期の記録について何か書かねばならぬとのことなのだが、すでに四〇数年も前のことなので、あまり覚えていない。幸い家が戦災を免れた結果、古い記録が若干見つかり、これをなんとか整理して山崎さんとの約束を果さねばと思っている。

松高山岳部は大正九年に今日ご出席の福林先輩らが設立され、戦後の学制改革まで続いたわけだが、なしろ田舎の学校であり、極めて自然に、まるで自分のところを歩くようにしよっちゅう山に行っており、特に一番近くて金もかからないということで穂高が中心だった。私たちのころの松高には、これも田舎の学校のせいだろ

うが、誰が作ったのか妙な伝統があり、当時既に山登りの記録というものもかなり出されてはいたのだが売名登山は絶対いかん、記録を作るために登るなどは邪道である、といった具合の極めて野蛮な風潮があった。従って私も随分山に登ったが克明に記録をとるというようなことはしたことがなく、最近の書物、例えば山崎氏の本などに私の記録がでていいるのを見て驚いている次第だ。大分無責任なようでもあるが、記録を書くに値するようない山登りをしたとは今も思っておらず、それでよかったと思っている。

ほとんど穂高に明け穂高に暮れるといった状況だったので、当時の私は、ヘリコプターで目隠しされて穂高のどこへ降ろされてもここはどこか分かるんだ、などと豪語したほどだった。特に野口秋人（旧姓内山、現JAC九州支部長）とは随分いっしょに登った。

奥又白へ打ちこむようになった動機といえは、たしか昭和初期の関西岳連報告だったかに、前穂東面と鹿島のカクネ里が残された二つの山城だといった表現があり、また当時梓川畔をしよっちゅう歩いてたわれわれにどうしても目につくのが前穂のバットレスであったわけだ。しかしどうして近づけばよいのかさえわからず、本格的に東面を考え出した昭和三年ごろからは、暇さえあれば前穂や北

尾根からのぞいては、岩壁基部にベースキャンプを張れぬものかと考えた。

昭和五年の夏は明神池からひょうたん池経由、あるいは奥又本谷を直接つめるといった具合にルート探しに歩き廻り、なんとか行けることだけは判ったが、当時人夫を使う金も無く、自ら七、八貫の荷を担いで荷上げするのは無理と考えた。この夏の後半には下又白、中又白は勿論、今のA沢の下降も試みた。

翌昭和六年の夏には、涸沢側から行けぬものかと、北尾根の三、四のゴル、あるいは四、五のゴルから下降してみたが何れもだめ。窮余の一策として、五、六のゴルから下ったところ、ベースとして以前から好適と考えていた奥又白の池に辿り着き、三年がかりのルート探しに成功した。それで八月も半ば過ぎたところに、寺島、沼野、数井らとこの五、六のゴル越えのルートを辿り、始めて奥又の池にテントを張り、約一週間の滞在でいろいろなところに登ったわけだ。

部報に誤って昭和七年としてしまいい、山崎氏に大変迷惑をかけた経緯がある。

この一週間には随分いろいろ登ったのだが、技術的には遅れた田舎武者揃いで、しかもハーケンなどのアーティフィシャルエイドを使うことを邪道と考えていたものだから、その年および翌年あた

りは人力で登れる限界のところしか登っていない。それでも当時のスケッチを最近になって見てみると、いわゆるD壁以外は全部登ったのではないかと思う。A壁は中央と右端を登った。C壁はテラスへ出る手前のチムニイ状のところが悪かった。他にV字雪渓の上辺りなど登れそうところをやたらと登ったがはっきり記憶していない。

記録は発表しなかったが、確かその翌年、日本山岳会に渡辺漸さんという先輩がおり、すずめられのままに赤坂辺りでの小集会に出かけて前穂東面について一席ぶつたことがある。記憶の新しくったことでもあり、今よりはまともなことをしゃべったのではないかと思う。

前穂での苦勞といえは、岩壁も手強かったが、それよりも奥又の池へのルート三年越しで苦労して見つけたことであり、これが岩登りよりもずっと印象が大きい。当時は五円もあれば上高地で二週間くらいは滞在でき、千山寮という仲間の菓窟からは絶えず誰かが山にでかけており、組織的でなかったことも記録をださなかつた理由であった。もう四十年もたつてもうろくしたが、今夜出席の仲間と協力して、なんとか満足してもらえる程度にまとめてみるつもりである。

* * *

以上が今井田氏の回想談をまとめたものであり、このあと座談会風にご出席の方々の発言となる。

沼野 東壁初登への直接的な刺激は二つあった。一つは今井田氏の述べた関西岳連の記事であり、もう一つは登った前年にスイス帰りの浦松佐美太郎さんに徳沢でお会いしたことだ。浦松さんらはその年、ルンゼ(A沢)を登って前穂の頂上でキャンプされて徳沢へ下って来られたところで、双眼鏡でのぞきながら盛んに誰かと話されていた。浦松さんに先に登られてはかなわないと思った。

今井田 その年、浦松さんは有明の中山一郎という案内人を連れて登っておられ、私たちはそのパーティの登攀ぶりを霧の濃い日に北尾根から見守ったものだった。霧の中で声だけ聞え、はらはらした記憶がある。

沼野 浦松さんも前進キャンプの必要性を認めておられた。話が変わるが、中又白を野口と二人で登った時、遅くなってしまい池に着いたのが五時ごろだったが、ライトの用意もないままに、なんとか下れそうなどころをどんどん急いで下って奥又本谷へでたことがある。これがいつのころからか松高ルンゼと呼ばれるようになったルートだ。

数井 昭和五年三月に野口氏と北尾根に登り、東面パットレスを教えられたのが、奥又との出会い

だった。その後の印象といえば、五、六のコルを何度も何度も越えて池への荷上げをやったことや、同行の寺島があつた冷い池で泳いだことなどが思いだされる。

今井田 この年以後はほとんど毎年入ったようだし、私や野口が後輩に発破をかけて、特に積雪期をめざすようになっていった。

菅能 昭和七年三月に中村と登った時は、(山崎註)関東学連報告には出ておらず、「山とスキー」昭和八年十二月号に出ている。会報「山」三四九号参照)これがはつきりしない。昭和七年というのは私の在学期間からいって間違いなく、山崎氏のご指摘もあり、三月二六日ではなかったかと思う。二日続きの晴天の二日目であった。橋本文彦は風邪で参加できず、中村譲と二人だった。中村のたてた計画では前穂頂上からさらに北尾根を下降することにもなっていたが、これは果せなかった。三回目のアタックで、午前一時に池を出発して、略奪点からはA沢を登るだけ離れて壁らしいところを登った。一カ所チムニイ状のところが悪かった。帰りは、A沢を下った。その年は天気が悪く遭難者が多くでた。

中村 岩小舎に長く滞在していた間には、加藤文太郎氏もみえたが、遭難死した人の座った縁起の悪い岩に腰かけられたのが想いだ

される。昭和七年一月のコブ尾根での小川登喜男さんたちとの出会いは本当だ。小川氏がコブを越したの忘れわれはやめたのだ。その年の暮れの屏風岩の記録(昭和八年一月一日、一日東京朝日新聞掲載)については、朝日新聞の田村さんという記者に、ある酒席で記事を約束してしまった経緯がある。同行の橋本は後に病死したが、度胸のずばぬけていい男だった。(屏風岩登攀の詳細説明があつたが紙面の都合で省略する)

話題はやがて昭和一〇年代の近代的登山の時代へと進み、「わらじ」の復刊、山崎次男、村山博美氏らの活躍などについては牧野、竹内、大島氏らが語られた。

関西支部創立40周年 記念懇親会 五月一七日(土)午後五時から神戸の摩耶ロッジで懇親会が行われ、今西支部長の挨拶、支部略史につづいて、会を代表して望月副会長が祝詞をのべ、会食後別室に移って深夜まで創立当時の回顧談を古い会員たちから聞くことができた。また支部役員の尽力で行われた福引は好評。一八日(日)はハイキング組と高山植物園、森林公園見物組にわかれて散会した。

▽参加者 望月達夫、藤島玄、鈴

目ながらも、当事者の方々から直接語られたことの意義は大きい。これまた、松高OB各位にとっても、忘却の彼方にある若き日の情熱を引き戻す楽しい一刻となったであろうことを願ってやまない。最後にご参集いただいた各位にこの誌上で改めてお礼申し上げる次第である。(越田和男)

田研二郎*沼野洋一*福林正之 *中村譲次*菅能鷹一 山崎安治 織内信彦*竹内佐郎 伊藤文三 越田和男 横山厚夫 金坂一郎 板倉勝正 河野幾雄 菅野弘章 岡沢祐吉 野上成男*春田俊郎 折井健一 鳴原啓佐 泉 久恵 *山上良夫 和久井正明*牧野康夫 堀内章雄 近藤信行 鈴木実*数井保太郎*大島郁彦 田村宏明

木敏雄、吉沢一郎、湯浅道男、神崎忠男、伊丹紹泰、津田周二、中村勝郎、山本吉之助、富田健一、山本忠著、仲西政一郎、松長晴利、角口想蔵、大野光彦、大西雄一、西村清一郎、大西康雄、川井一郎、川崎泰男、内田昌子、山下政二、杉本秋之介、玉井裕夫、出口一良、塩津正英、飯田勝久、米本隆夫、今西寿雄、二本信二、水野政博、阿部和行、宗実慶子、桑田結、金井健二、林茂、久野英一郎、竹尾宗和、村井葵、磯部幸則、金井良碩、井岡扶、鼎治紀(以上44名)

VI 東海支部年表

『東海山岳』第三号 刊行のご案内

東海支部創立以来今日までの十数年間に当支部および支部員によって行なわれた多くの山行の中から、代表的な海外登山を選び、その記録ならびに関連して書かれた論文、紀行、書評を収録したものの。この第三号は、海外登山に焦点を合わせて編集され、東海支部の過去の業績を総括するとともに、今後の飛躍への踏み台として重要な意味を持つものとなります。

目次 序/写真四葉(アイガー、アコンカグア、マカルー、パタゴニア) I 記録、アイガー北壁(一九六五年)、アコンカグア南壁(一九六六年)、マカルー南東稜(一九七〇年) II 座談会、「アイガー、アコンカグア、マカルー」 III 論文、「ヒマラヤ登山へのアドヴァイス」、「極限を登るソ連のアルピニスト」、「高所医学の基本的問題」、「登攀技術の基礎」ロービング論」、「高所における氷雪技術」

IV 紀行、「アンデスへの学術遠征」、「パタゴニア紀行(付・フイツツ・ロイ山群地図)」、「アルプスの登山学校に学ぶ」 V 書評、「遙かなる未踏の尾根—マカルー一九七〇」、「アンナプルナ南壁」

VI 東海支部年表

神谷記念図書目録(I)

図書委員会

故神谷恭氏の所蔵図書の一部
(一五七冊)を神谷家から日本
山岳会に寄贈いただきました。
目録は次の通りです。

古い書棚とともに、末永く会
に保存すべく、談話室の角に神
谷記念図書として設置致しまし
た。

稀観書を中心として

・小島鳥水著
日本アルプス 第一巻、第四
巻 前川文栄閣 四冊
雲 表 袖珍版 佐々良書
房 一冊
山水無盡蔵 隆文館 一冊
扇頭小景 第三版 新声社
一冊

不二山 増訂第五版 如山堂
書店 一冊
日本山水論 隆文館 一冊
アルピニストの手記 書物展
望社 一冊
偃松の匂い 故木暮氏蔵書
書物展望社 一冊
山の風流使者 特装本第一一
号 岡書院 一冊
・木暮理太郎著
山の憶い出 上下愛蔵版 龍

星閣 二冊
山の憶い出 上下普及版 龍星
閣 二冊

・榎 有恒著
山行 特装本第九冊 岡書
院 一冊
山行 梓書房 一冊

・松方三郎著
アルプス記 特装本第四五冊
龍星閣 一冊
遠き近き 龍星閣 一冊

・高頭 式編
日本山嶽志 博文館 一冊
・志賀重昂著
日本風景論 第四版 一冊
・伊藤秀五郎著
北の山 梓書房 一冊

・辻村伊助著
スウイス日記 横山書店 一冊
・藤木九三著
登拝頌 一冊
冠 松次郎著
黒部溪谷 一冊
・鹿子木員信著
ヒマラヤ行 政教社 一冊
・松平定能編
甲斐国誌 和綴全巻 二九冊
・小泉秀雄著

大雪山登山法及登山案内 大
雪山調査会 一冊

・田村 剛著
登山の話 文化生活研究会
一冊

・利根水源探検隊
大利根水源紀行 精華堂書店
一冊

・野崎左文著
日本名勝地誌 東山道の部上
下 博文館 一冊
・吉江孤雁著
霧の旅 中興館 一冊
・田山花袋著
東京近郊一日の行楽 博文館
一冊

・一戸直蔵著
日本アルプス縦断記 大鏡閣
一冊
・別所梅之助著
霧の王国へ 警醒社書店 一
冊

・矢澤米三郎、河野齡蔵共著
日本アルプス登山案内 岩波
書店 一冊
・北尾鏡之助著
山岳巡礼 梅溪書店 一冊

・幸田露伴編
掌中山水 緊精堂 一冊
・河東碧梧桐著
日本の山水 松本商会出版部
一冊
・村松清陰著
信濃名勝詞林 目黒書店 一
冊

執筆 樋口敬二、高田光政、原
真、浅見正夫、田村俊介、永坂鉄
夫、池沼 慧、高木健太郎、矢入
憲二、中島 寛、伊藤行人、五百
沢智也、大倉大八、石原国利、白
籟史朗

編集 浅見正夫、原 真
体裁 A5判縦組三五〇ページ
発行日 一九七五年六月二〇日
申込方法 郵便振替(口座番号
名古屋一三七四九番、加入者名日
本山岳会東海支部)にて前金でお
申込みください。一冊につき二二
〇〇円(送料含む)です。

第一八回 紅葉会
日時 一九七五年一月八日
(土)〜九日(日)
場所 静岡県磐田郡水窪町山住
山住神社籠堂

募集 40名限り到着順締切。
会費 四〇〇〇円
和銅二年(七〇九年)伊予国大
山祇神社より遷祭した山住大権現
の籠堂で懇談会を行い、翌日A班
は竜頭山(約八時間)B班は常光
寺山(約五時間)の山行を催す。

申込は直接支部宛に会員番号、
年令、電話を明記して申込金一〇
〇〇円同封のこと。
詳細は後日申込者に直接連絡す
るが、予定としては第一日豊橋駅
発急行「伊那2号」一〇時五十六分
乗車。水窪一二時三十分。水窪よ
り約三時間徒歩にて山住神社着。
会場到着は一六時ころの予定。

船形山
創立70周年記念宮城支部行事
六月十四日(土)夕刻定美の清
水館に集合、五時頃から懇親会、
支部有志の尽力によるシオデ、フ
キなどの山菜を賞味、翌十五日午
前五時、自動車に分乗して出発。
途中の沢で朝食、あやぶまれた天
候も登るほどに初夏の日ざしが降
りそそぎ、ブナの新緑やキタコブ
シの花の咲く尾根を登り、後白髪
山を経て、高嶺の花の咲きはじめ
た船形山に登頂。梅雨時で遠望は
きかなかつたが、新緑と残雪のお
おどかな東北の山をたのしんだ。

(参加者) 宮城支部 伊達篤郎、
吉野禎造、板橋元一、柴崎徹、相
沢甚平、蓬田時男、高橋憲二、庄
司駒男、千田早苗、高橋功、飯野
信、遠藤昭治、佐々木豊喜、佐々
木郁夫、永浦忠吉、高橋二義、菅
原正一、佐藤良、佐々木祐二。北
海道支部 高沢光雄、平野明、山
川力、柳田涼子、赤石喜恵子。東
京 野口末延、望月達夫、網蔵志
郎、横山厚夫、横山康子、山田哲
郎、中西章。(計31名)(望月記)

昭和五十年七月二十日発行
113 東京都文京区湯島一六一一
利根川商事(株)くらビル
発行所 法人 日本山岳会
社団法人
発行者 今 西 錦 司
編集代表 大 森 久 雄
(813)二二八六(代表)
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技 報 堂

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

かんあおい

山下一夫著 <A 5判>定価2,600円

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年
日本山岳会東海支部
<B 5判430頁・カラー64頁>定価4,800円

未踏の山河

シプトンの自叙伝 大賀二郎・倉知 敬訳
<A 5判440頁>定価1,900円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著 <菊判584頁>定価2,500円

森林・草原・氷河

加藤泰安著<A 5判482頁>定価1,500円

山の古典と共に

大島堅造著<四六判280頁>定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著
<A 5変型判340頁>定価1,200円

我がスキーシュプール

麻生武治著<B 6判388頁>定価3,400円

昭和50年版

山日記

日本山岳会編
<A 6ポケット判>定価950円

山岳

日本山岳会編
<A 5判>

68年 3,000円
67年 2,500円
66年 2,300円
65年 2,000円
64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円

総索引 1,000円

山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編

<A 6判126頁>1集240円・2集280円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編 <B 6判202頁>定価480円

日高山脈

北大山の会編
<菊判362頁>定価2,200円

吉沢一郎古稀記念論集

カラコラム

<B 5判200頁>定価3,400円

小さな頂

一原有徳著
<A 5判360頁>定価2,900円

原野から見た山

坂本直行画文集
<B 5箱入布特製本>定価4,200円

雪原の足あと

坂本直行著<B 5判206頁>定価2,800円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖

<A変型208頁>定価3,600円

いろいろばた

南会津山の会
<B24どり判320頁>定価1,900円

すこし昔の話

初見一雄著<四六判400頁>定価1,200円

ブータン感傷旅行

小方全弘著 <菊判280頁>定価980円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編 <A 5判350頁>定価900円

登山・スキー用具専門店

山の店

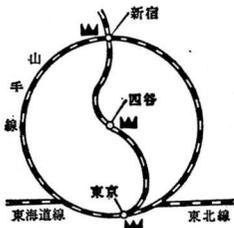
大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

- 買いやすい
山の店
- 北へ来たたら
山の店
- フレッシュな
山の店

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐 盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432-1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560-8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6566
日本信販加盟店



山友社 たかはこ

なるべくなんにも
持たない方がいい
けかも、どうして
要するものがある。
なにしろ人間ですから
まして登山ですから
どしどし必要なもの
をこころえまわす
責任はもっています

かたるギンティ
てんや 281-8456
中央区八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京都・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京都・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



会務報告

5月理事会

(5月16日午後6時ルーム)

出席者 今西会長、織内、望月副会長、近藤、原、大倉、山本良、浜野、神崎、田村宏、皆川、小倉、山本健、高遠、黒石、田村俊、橋本、浅田、大森各理事。委任 浜口理事。

議案

・理事の任務分担について (織内) 各理事の担当は次のように決定。

支部・会員担当 望月副会長 浜野、高遠 財務委員会 山本健

山岳編集委員会 近藤 会報編集委員会 大森

山日記編集委員会 皆川 山研運営委員会 小倉

集委員会 神崎、浅田 海外連絡委員会 田村俊、田村宏

指導委員会 田村宏、大倉、浅田 医療委員会 浜口

自然保護委員会 山本良 青年懇談会 大倉、橋本

婦人懇談会 黒石 図書委員会 山本良

書評委員会 大森 遭難対策委員会 橋本

高所登山委員会 原 学生部指導委員会 浅田

承認 承認

・常務理事選任について (織内) 次のように決定。

浜野、高遠、山本健、近藤、小倉、山本良、大森各理事。

承認

ルーム日誌 (50年5月)

- 1日(木) ナンダ・デヴィ委員会
6日(火) 婦人懇談会ヒマラヤ研究会
8日(木) 谷川岳準備講習会
10日(土) ナンダ・デヴィ委員会
12日(月) 理事懇談会、学生部総会、山岳編集委員会
13日(火) 指導委員会
14日(水) 婦人懇談会ヒマラヤ研究会
15日(木) 指導委員会、婦人懇談会委員会
17日(土) 谷川岳準備講習会
19日(月) 第三〇回小集会(三極に挑む)
20日(火) 評議員懇談会
21日(水) 三水会、婦人懇談会ヒマラヤ研究会
22日(木) ナンダ・デヴィ委員会、学影会
26日(月) 婦人懇談会ヒマラヤ研究会
28日(水) 婦人懇談会
29日(木) ナンダ・デヴィ委員会
30日(金) 青年懇談会

5月中来室者四四六名

終身会員

一四二四 浅原 重継 昭和五〇・四

一六六四 外山 義夫 昭和五〇・四

五八九四 仲村 恒明 昭和五〇・四

除籍取消者

六四三〇 白木 正俊

七〇七一 轟 馨

退会者

四八〇二 木村友三郎(50年5月)

改名

一三三八 国分 勤兵衛
七三二〇 久下沼 和雄
七〇六六 八木原 博子

支部変更

六二七〇 久保田 保雄 静岡支部
六三六四 田辺 恵造 静岡支部
六〇七四 松坂 良一 越後支部
七二〇三 多田 勇三 越後支部
四五六三 下条 寛一 信濃支部
七八二六 東 司 岐阜支部

北海道支部役員異動

四月七日開催の支部総会で昭和五十年度の支部役員が次のように決定された。

支部長 大塚 武
副支部長 山川 力
総務 辻井 達一
企画 新妻 徹
記録 高沢 光雄
会計 平野 明
集會 浅利 欣吉
集會 萩谷三枝子
会計監査 可知 邦成
同 氏家 民雄

第八回図書交換会 (図書委員会)

恒例の図書交換会は、十月二十五日(土)にきまりました。毎回多くの会員諸氏から協力をお願いしてまいりましたが、本年も多数ご出品くださいますよう、不要の図書や交換できるものを準備くださるよう、よろしくお願いたします。出品締切りは十月四日(土)といたします。貴重本、珍しい本を歓迎します。

エベレスト登頂の祝賀会

エベレスト日本女子登山隊の文部省、日本山岳会など後援団体による登頂祝賀パーティが六月二十日午後六時半から東京紀尾井町のホテル・ニューオータニで開かれた。

久野英子隊長ら十二人は、文部省体育局、山岳会員ら出席者二百人の見守るなかで永井道雄文相からスポーツ功労者の表彰状と盾が一人一人に、アンツェリンには感謝状と記念の時計がそれぞれ贈られた。

祝辞のなかで、今西錦司山岳会会長は「この壮挙はマナスル、アンナプルなど一つ一つステップを刻んでこられたものによつ」と前置し「これで高度の問題は解決しましたが、まだ残っている未登峰の六、七千m峰に女性隊として登ってもらいたい」と激励、また永井文相は「わたしは中学時代信州に出かけたことぐらいで、とてもエベレストは考えられなかった。これで日本女性は強いということを考えるチャンスを与えてくれた」と国際婦人年になんであいたこと、また元新聞記者らしく「取材したところチャタリングではないか。女性がチャタリングでなくたら生存の理由を失う」と、ユーモアを交えて語っていた。ネパール大使、長谷川芳相の祝辞も続き、登頂のフィルムを映写するなど、約二時間の歓談が続いた。

また、七月四日には、東京丸ノ内の外人記者クラブ内で、日本山岳会、日本ネパール協会、ヒマラヤン・クラブ日本支部三者の共催による歓迎会が開かれた。

(片山全平)

- 新刊図書受入報告 (1975年1月)
- | | |
|--|-------------------------------|
| 1) Die Alpen Club Monatsbulletin des Schweizer Alpen-Club '74 (11) | 5) Mountain 40号 |
| 2) Der Bergsteiger '74-12 | 6) あしなか 144 |
| 3) The Mountain Club of South Africa Journal '73 | 7) 山と溪谷 437 |
| 4) The Geographical Journal 140 (3) | 単行本 |
| | 1) 三井松男著「遺稿と追憶」 |
| | 2) 日本大学ネパール・ヒマラヤ登山隊 シタ・ツツラ初登頂 |
| | 3) 今西錦司著 今西錦司全集 5 卷 |